

21 世紀のインタープリテーション - アメリカ国立公園における変革

古瀬浩史 (日本インタープリテーション協会／帝京科学大学)

キーワード：アメリカ国立公園、インタープリター、コンピテンシー

1. はじめに

2010年代になって、アメリカ国立公園におけるインタープリテーションの考え方が急速に変化している。「21世紀のインタープリテーション」を掲げる文書が相次いで出され、インタープリテーションの目的が改めて文章化され、ガイドワークやトークのようなプログラムのデザインや、インタープリターのトレーニングにおいても変化が進行している。これらは、フリーマン・ティルデンに始まる国立公園局のインタープリテーションの体系化や発展の中でも最も急速で大きな変化であるように感じられる。本稿では、その背景や状況をまとめ、日本の今後の取組についての提案を行いたい。

2. 変革の背景

21世紀のスキル

アメリカでは2000年代に入り、21世紀にふさわしい市民のスキルやコンピテンシーに関する議論や報告が活発なり、諸機関によって様々な検討が行われた。これらは、「生涯学習」「グローバル化」「デジタル時代」といった巨大トレンドの出現に対し、新しい時代に必要となる市民のスキルを検討することを目的としている。連邦教育省が主導してつくられた「21世紀のスキルためのパートナーシップ The Partnership for 21st Century Skills」は、マイクロソフトやアップルといったいわゆるIT企業からも人材が参加して2002年から活動している団体で、「21世紀の教育のフレームワーク」を示し、継続した改定を行っている¹⁾。このフレームワークでは、学習と革新のための「4つのC」として、批判的思考 Critical thinking、創造性 Creativity、協働 Collaboration、コミュニケーション Communication を中心的なスキルとして位置づけている。このフレームワークは、州の教育カリキュラムに導入されたり、全米教育協会 (NEA)、アメリカ学校図書館員協会 (AASL)、博物館・図書館サービス機構 (Institute of Museum and Library Service : IMLS) 等のレポート²⁾や基準でも採用され、国立公園局の21世紀のインタープリテーションの検討においても一つのルーツになっていると考えられる。国立公園局のインタープリテーション・教育部門は博物館協関係団体と継続的な関係を持っており、2014年に出されたアメリカ国立公園局の「インタープリテーション技術 ビジョンペーパー」³⁾では、21世紀のインタープリターのスキルに関する検討が、スミソニアン協会とのパートナーシップによって検討されたことが紹介されている。

新しい時代に適合しようとする教育改革は、日本の学校教育や、社会人の評価にも影響を及ぼしており、一つの大きな潮流として捉えることができるだろう。

生涯学習の重視

アメリカでは、学校教育の時代から生涯教育の時代に変わりつつあるとされている。このことも、21世紀のインタープリテーションの考えに影響を及ぼしていると思われる。例えば、Falk and

Dierking (2010)⁴⁾は、生涯の中で学校において過ごすのは5%にしかなかったり、科学教育の多くはインフォーマルな環境で行われているとし、フリーチョイス・ラーニングの重要性を指摘した。「インタープリテーション技術 ビジョンペーパー」³⁾では、このような論文を複数引用した上で、公園や博物館などがこのような社会のニーズに貢献できるとしている。

3. インタープリテーションの目的

本稿で紹介している21世紀のインタープリテーションに関する文書の中で、国立公園局によるインタープリテーションの定義は従来から変化していないものの、インタープリテーションの目的を示す文書には新しい変化が見られる。

「21世紀のインタープリテーションの基礎」⁵⁾、また、「21世紀のインタープリテーション能力の基礎」⁶⁾では、では、インタープリテーションの伝統を踏まえながらも、「インタープリテーションの原則は進化(変化)する」とし、現在のインタープリテーションの目的を次のように記述している。

インタープリテーションの3つの目的(goal)⁵⁾、

- 意味ある (meaningful)、記憶に残る (memorable)、挑発的 (provocative) な体験の開発によって多様な参加者を巻き込む
- 自然および文化的資源の保存において、管理責任の共有 (shared stewardship) と幅広い協働 (Collaboration) を奨励する。そして、
- 生涯学習 (lifelong learning) を追求し、より公正な社会の構築を支援するグローバルな責任感を持った市民を育成する。

インタープリテーションの目的(Purpose)⁶⁾

インタープリテーションの根本的な目的は、意味ある学びの体験と楽しいレクリエーションを通じて人々の生活を豊かにすること、幅広い協働や共有されたスチュワードシップ (管理責任) を通じて自然や文化的資源を保全すること、そしてコミュニティを創り、健全な地球を持続するために社会意識、環境意識触発することです。

「意味ある (meaningful)」、「挑発的 (provocative)」といった、伝統的に使われてきた用語に加え、「スチュワードシップ (stewardship)」や「協働」は、近年の文書における頻出用語となっている。また、「3つの目的」の3番目の項目では、生涯学習の追求が明確に示されている。これまでのインタープリテーションは、それぞれの公園等における地域資源の保全に関わるコミュニケーションとしての側面が強かったのに対し、対象や目的の範囲が、地球規模の環境保全や社会の公正さへの意識など、より広く拡張されている。

4. 「資源に基づく」と「参加者中心」

21 世紀のインタープリテーションの特徴は、資源に基づき (resource-based)、参加者中心 (audience-centered) であるとされる。このうち、「資源に基づく (resource-based)」は、従来からのインタープリテーションの特徴と言えるが、この中にはさらに資源を新しい知見や証拠 (evidence) を元に検証し、時代とともに変化する意味を再解釈したり、新しい文脈で捉え直したりする作業を含んでいる。

参加者中心 (audience-centered) は、21 世紀のインタープリテーションを特徴づけるもっとも重要なキーワードである。聴衆を単なるプログラムの参加者とみなすのではなく、「意味作り (meaning-making)」(従前からインタープリテーションは「意味作り」だと言われている) における重要なステークホルダーであるとし、インタープリターやエドゥケーターと参加者が協働や共創する機会をつくることが求められる。具体的には、プログラムの中で参加者に資源に関する意見を積極的に求めることや、対話 (Dialog) 方式を用いたガイドの手法などがあげられる。

5. インタープリターに求められるコンピテンシー

「コンピテンシー」は、21 世紀型教育の中でしばしば議論される、資質、能力、態度などを示す用語である。単なるスキルや能力だけでなく、実際に行動するモチベーション等も含んでおり、行動特性と表現されることもある。日本の産業界や教育においても、コンピテンシーの議論が盛んに行われている。国立公園局では (おそらく) 2000 年前後から職員に求められるコンピテンシーが整理され、職員のキャリアデザインやトレーニングの中で扱われてきた。新しい時代のインタープリターに求められるコンピテンシーとしては、以下の項目が挙げられている (資料間で若干の違いがある)。これらは、一般的なコンピテンシーや、リーダーシップのコンピテンシーなどと連動した、インタープリターのコンピテンシーとして整理されている。

- ・ 進化するインタープリテーションの原則
- ・ 自己認識とバイアスの克服
- ・ 参加者 (Audience) およびコミュニティとのリレーションシップの構築
- ・ 地域資源 (site resources) と変化 (evolving) する文脈の調査
- ・ 関連性 (Relevant) のアイデアと「本質的な問い (Essential Questions)」の探求
- ・ エンゲージメントテクニックの統合
- ・ 効果的な体験 (Experiences) の計画と設計
- ・ 効果的な体験の実施

これらは、21 世紀のインタープリテーションの特徴として示された「資源に基づく (resource-based)」や「参加者中心 (audience-centered) から導かれる内容になっており、同時に、ガイドやトークなど、具体的なインタープリテーションの実践を大きく変化させようという試みにつながっている。

6. 考察と提案

アメリカを中心に、長い時間をかけて体系化されてきたインタープリテーションの方法論は、「テーマに基づいた (Thematic) インタープリテーション」と呼ばれ、個別のプログラムのデザインから

全体計画までを貫く考え方として体系化され、広く普及している。参加者中心 (audience-centered) のインタープリテーションは、それとは異なるアプローチと言えるが、現状においてはプログラムデザインから全体計画までを包括するような体系化はできていない。今後、既存の方法論との融合が模索されていくのではないだろうか。継続して注視していきたい。

一方、日本のインタープリテーションは、「自然体験型の環境教育」としての位置づけで広まり、1990 年代にはインタープリターのトレーニングの中で、体験学習法のモデルがプログラムデザインを支える学習理論として取り上げられるようになった。それらの経過の中で、日本のインタープリテーションでは参加者中心 (audience-centered) の手法が先んじて普及していたと言える。一方、日本のインタープリテーションでは地域資源が持つストーリーを効果的に伝える基礎的な方法論、あるいはインタープリテーションの全体計画等の手法の体系化はあまり進まなかった。つまりインタープリテーションの特徴のうちの「資源に基づく (resource-based)」の部分が十分でない面があった。例えば、ビジターセンターのインタープリテーションの中で、地域の自然資源に関する独自の調査やオリジナルなストーリーが検討されることはあまり多くない。このことは、インタープリテーションの重要性についての評価の獲得や公的なサービスとしてのアカウントビリティの弱さにつながっていたのではないかと。日本においても、今後 21 世紀のインタープリテーションを検討し、現状の課題を解決し、社会の要請に応えていく必要があると考えられる。

具体的に挙げるならば、一つはインタープリターに求められるコンピテンシーの検討である。私なら、「コミュニティや社会の役にたとうとする (だれかのなにかの役に立つ) 行動特性」をインタープリターのコンピテンシーとして挙げたい。このような議論の場を創ることを提案したい。

参考文献

- 1) Battle for Kids · Home.
<https://www.battelleforkids.org/networks/p21>
(2020 年 3 月確認)
- 2) IMLS Office of Strategic Partnerships. Museum, Libraries, and 21st Century Skills. Washington, DC: Institute for Museums and Library Services, 2009.
- 3) National Park System Advisory Board Education Committee. Interpretive Skills Vision Paper-21st Century National Park Service. Washington, D.C.: National Park Service, 2014.
- 4) John H. Falk and Lynn D. Dierking. The 95 percent solution: School is not where most Americans learn most of their science: American Scientist · November 2010
- 5) Interpretive Development Program Stephen T. Mather Training Center. Foundations of 21st Century Interpretation: National Park Service Harpers Ferry, WV, 2016(revised 2017)
- 6) Interpretive Development Program Office of Learning and Development. The Foundations of Interpretation Competencies for the 21st Century. Stephen T. Mather Training Center:Harpers Ferry, WV: National Park Service 2017